情報を伝える　魅力が伝わる　十日町市をもっと好きになる

とおかまち 市報

Public Relations

No.259
2016 1/10
平成28年 1月10日号

TOKAMACHI とおかまち10周年

特集 松代地域特集 竹所のキセキ 10～17ページ

×

特集 小田切徳美さん×市長 新春対談 3～9ページ

平成25年、竹所集落で18年ぶりの子どもの誕生となった渡辺光太くんも2歳になりました。この冬は、近所のカール・ベンクスおじいちゃんと一緒に里山の自然を楽しんでいます。

その他の主な内容

2 新年のごあいさつ
ピックアップニュース
18 通話録音装置を無料で貸し出し
連載コーナー①
19 こへび隊・サポーター通信／想史創愛
20 キラメキワーカーズ
21 お知らせ・ガイド
連載コーナー②
26 熱中・夢中／おらほのたから
28 ジュニア芸術祭

年頭のご挨拶

新たなフィールドを実感する年に

十日町市長　関口芳史

年頭にあたり、謹んで新年のごあいさつを申し上げます。市民の皆さまには、日ごろより市政にご理解とご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。

昨年は、市制施行10周年の節目を迎え、この喜びを市民の皆さまとともに分かち合い、これを機に花開く年として十日町市の未来ストーリーを描いてまいりました。

信濃川は水利使用許可の期間更新の時期を迎え、5月8日には、東日本旅客鉄道株式会社と河川環境の向上や地域活性化の取組みなどを盛り込んだ覚書を締結しました。川の流量も回復し、大勢の子どもたちからラフティングを体験してもらうとともに、河川環境が改善されたことで、秋のサケの遡上は前年の2倍以上となる1500尾を超えました。

また、夏に開催した大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2015は、作品の数、質ともに過去最高のものとなり、前回展を超える約51万人の方々からこの地域にお越しいただきました。この芸術祭が地方創生の先駆的な取組みの事例として注目を集め、文部科学大臣をはじめとした大勢の方々から視察にもお越しいただき、十日町市流のまちづくりの手法に手ごたえを感じたところです。

さらに、この市制施行10周年を機に、11月1日に新たな市民憲章を定めました。詩人の谷川俊太郎さんからご起草いただき、雪や縄文などの言葉が散りばめられた十日町市らしいものができあがり、親から子へ、子から孫へと受け継がれる未来への道しるべとなることを期待しています。

そして、4月1日に施行した「十日町市まちづくり基本条例」をはじめ、今後目指すべき将来の方向や人口の将来展望を示す「十日町市人口ビジョン」、今後の5か年の目標や具体的な施策を示す「十日町市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定してきました。

これまでの取組みを足掛かりとして、今年、十日町市は次のステップに大きく歩みを進めるための「第二次十日町市総合計画」を策定します。これまでと同様に、人にやさしいまちづくり、活力ある元気なまちづくり、安全・安心なまちづくりの3つを基本方針として、誰からも選ばれて住み継がれるまちを目指します。

例えば、活力ある元気なまちづくりとしては、新規創業を促進するためにビジネスプランコンテストの開催、創業支援補助金制度の創設、インキュベーションオフィスの設置を行います。また、中小企業診断士による経営指導や創業相談の充実、そして若者の就業促進にも取り組みます。

また、次の10年間で重点的に推進する未来戦略の1つとして、市内の電力消費量の30％相当を再生可能エネルギーで創出することを目標に掲げ、豊富な温泉熱を使った温泉バイナリー発電や宮中取水ダムの維持流量を活用した小水力発電事業など、里山の資源をフル活用した取組みにチャレンジしていきます。

2020年には東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開催されます。昨年11月には、当市を事前キャンプ地としてもらえるよう、2002年サッカーW杯以来交流を続けてきたクロアチア共和国を訪問してきました。今年もなお一層、国際的スポーツキャンプの誘致を進めてまいります。併せて、当市が誇る県内唯一の国宝火焔型土器を、新国立競技場の聖火台のモチーフにしていただくよう、引き続き、関係機関に強く働きかけてまいります。

一方、平成25年認定の中心市街地活性化事業が佳境を迎え、昨年の産業文化発信館「いこて」と複合住宅施設「アップルとおかまち」に続き、この春には「市民交流センター」と「市民活動センター」がオープンします。さらに、新消防庁舎の完成や十日町病院の外来棟部分の開院など、まちの装いも大きく変わっていきます。市内で活動する人、訪れる人、そして移住する人を増やす取組みも積極的に進めていきます。

引き続き、地方創生のフロントランナーとして、山も里も元気なまち、選ばれて住み継がれる十日町市の実現に向けて全力で取り組んでまいります。

繰り返しになりますが、昨年で十日町市は市制施行10年を迎えました。しかし、この10年はあくまでも通過点であり、これからの20年、30年後に進むべき十日町市の輝けるビジョンを市民の皆さまとともに描いてまいりますので、今後も変わらぬご理解と、温かいご支援をお願い申し上げます。

結びに、本年が皆さま一人ひとりにとりまして、素晴らしい1年となりますよう心からお祈り申し上げ、新春のあいさつとします。

市長対談　第7弾

十日町市長　関口芳史

明治大学　教授　小田切徳美

十日町市に魅力を感じ、応援してくれる人に関口市長がお話を伺う恒例企画。今回のお相手は明治大学教授 農学博士の小田切徳美さんです。小田切さんは国の政策にも多く関わり、長年にわたり農山村の再生に注力されてきました。

今回の対談では、山間地を多く抱えた十日町市が持つ可能性を見出し、市の取組みの方向性を再認識する機会となりました。　※文中敬称略

選ばれて住み継がれる十日町市

里山の暮らしを明日につなぐ

第1章　農山村に寄り添う取組み

市長―一昨年、「地方消滅論」が発表され、日本中に衝撃が走りました。それに対し小田切先生は「農山村が持続する可能性」を提唱されました。地方消滅論が発表されたとき、どのように感じましたか。

小田切―「ムラの消滅」や「限界集落」など、農山村の将来を厳しい言葉で表現されることは、10年に1度ぐらい世間で話題になる傾向があります。今回も「また出たか」という印象を持ちました。

しかしながら、今回の「地方消滅論」は、あまりにも副作用が強すぎたと感じています。私は、農山村への取組みを「北風路線」「太陽路線」と表現しています。「地方消滅論」はまさししく「北風路線」。北風をビュービュー吹かせて住民の立ち上がりを期待したものと思いますが、現実には農山村の継続や、そこで生き抜くことを諦めてしまう地域や住民もでてきているのではないでしょうか。重要なことは地域に寄り添いながら可能性を共有化する「太陽路線」だと考えます。

市長―「北風」と「太陽」の表現は分かりやすいですね。私は「地方消滅論」を耳にしたとき、当市のような自治体が持つ危機感を市民の皆さんや、全国規模で共有する機会だととらえました。

十日町市は過疎先進地と言えるのではないでしょうか。市の人口のピークは昭和25年頃で約10万4千人でしたが、現在は5万5千人程度。65年をかけて、ほぼ半減している状態です。しかしながら、私たちはこの過疎という問題に対して先駆的に取り組んできました。今回のような「北風」から地域を、市民を守るかのごとく多くのことを実践しています。

小田切―十日町市の取組みは「太陽路線」を見事に実現しています。

集落の可能性を共に感じて歩んでほしい――小田切教授

市町村が合併すると一般的には行政は地域から遠くなってしまうものですが、十日町市は逆に地域に寄り添うように地域おこし協力隊をいち早く導入しています。集落に地域おこし協力隊が入り、住んでいる人たちと可能性を共有しながら一緒に歩んでいく。このことは全国的にも今一番必要なことで、各地の自治体にも真似してほしいです。

市長―市長就任後、さまざまな課題の中でも、まず初めに中山間地対策に注力しました。その一つが地域おこし協力隊制度の活用です。この制度は小田切先生が提唱された、素晴らしいものです。国の人的な支援の施策は、画期的なことではないでしょうか。

小田切―「補助金から補助人へ」とお話しすることがあります。これは補助金が必要ないという意味ではなく、補助金にプラスして人財を支援するということです。今必要なのは人であることを国が率先して示したことは、本当に画期的なことです。

市長―OB・OGも含めた地域おこし協力隊員が全国の自治体の中でも当市を選んでくれたことは大変ありがたいです。当市の場合は、地域が持つ課題を自ら解決するときに若者・ヨソ者の力を借りたい地域から、まず手を挙げてもらいます。そして、市内で活動したい協力隊志願者とマッチングします。その方が持つ技術や思いと地域の欲しているものが合致したときに配置を決定します。このマッチングがうまくいかないときには、志のある人でも残念ながら配置されないこともあります。勿体ない気もしますが、必要な地域に必要な人材を配置することが大事だと考えています。

小田切―まさにその通りです。全国的に起きている地域おこし協力隊をめぐる問題は、ミスマッチが生じやすいことです。アンケートで協力隊に志願した理由を聞くと、「地域貢献」「ビジネスチャンス」「自分探し」など、回答はさまざまであり、協力隊一人ひとりの志は非常に多様であることが分かります。同様に受け入れる地域も多様です。この多様と多様のかけ算で、ミスマッチが発生しているのです。その解決策が、十日町市で導入しているマッチングの手法です。先日もある講演で「このマッチングの手法が重要なので十日町市を見習ってほしい」とお伝えしました。

新たな問題はあるかもしれませんが、十日町市の積極的なチャレンジは、地域おこし協力隊に政策的に関わっている私としても非常にうれしいことです。

市長―それはありがたいことです。最も大事な部分を突き詰めると、やはり「人」ではないでしょうか。志のある人を志のある人たちがいる地域に配置することに尽きると思います。

小田切 徳美 教授 *Tokumi Odagiri*

昭和34年神奈川県生まれ。東京大学農学部卒業・同大学院修了。高崎経済大学助教授、東京大学助教授を経て、現在は明治大学農学部教授・同大学農山村政策研究所代表。

ふるさと有識者会議座長（内閣官房）、国土審議会委員（国土交通省）、過疎問題懇談会委員（総務省）、などを兼任し、国の政策づくりに尽力している。

第2章

大地の芸術祭がムラを開くきっかけに

市長―市内で活動した地域おこし協力隊の多くの皆さんが、退任後も市内に定住しています。約7割の方が住み続けてくれている事実はとてもうれしいことです。その秘けつは、受け入れる側の対応であったり、人々の温かさを含めた包容力であったりすると分析しています。この土壌ができたことは、大地の芸術祭の成果の一つではないでしょうか。知らない人・年齢差のある人・外国人など、今まで存在しなかった人々が集落に入り込むことは、一般的にはストレスになりますが、大地の芸術祭での足かけ20年間の活動がヨソ者を受け入れるトレーニングや、体制づくりに貢献しているのではないかと思っています。

小田切―私もまったく同じ仮説を立てていました。いつか実証したいと考えています。

よく「開かれたムラに移住者が入ってくる」と言われます。では、そのムラが開かれている理由を調べると、かつては宿場町であったり、炭鉱の町であったりと、昔に人の往き来があった地域が多いです。大地の芸術祭は、農山村に人の往き来を作りだしました。そう考えると十日町市はまさしく「開かれたムラ」になった可能性があります。そして、住民の皆さんは、3年に1回ムラを開くための訓練をしていると考えられます。

市長―お客様はもちろんですが、準備段階で作家やサポーターであるこへび隊が作品制作に入り込む期間が約半年あります。集落との共同作業にはいろいろな仕事があり、高齢者にも活躍の場があります。「おじいさん意外に力があるのね」、「おばあさんが作った料理おいしいね」など褒めてもらうことでモチベーションが上がります。当初は不安の声もありましたが、継続することで楽しさや感動などが一つ一つ広がってきたのではないでしょうか。

小田切―長期間のプロセスをムラの人たちが受け入れたことに感動します。継続が力になり、作品を共につくりあげる域に達したので

ヨソ者を受け入れる土壌は大地の芸術祭の成果――市長

関口 芳史 *Yoshifumi Sekiguchi*

十日町市長

今回の対談の会場は「ALE（エール） beer（ビア） &（アンド） pizza（ピッツァ）」。元地域おこし協力隊の高木千歩さんがオーナーとして運営しています。地元の食材にこだわった料理を提供しています。

地域おこし協力隊

平成21年度から総務省の事業として実施。人口減少・高齢化など、さまざまな課題を抱える集落を維持するため、都市部などから意欲ある人材を受け入れ、集落の維持・強化を図る取組み。活動期間は最長3年。市では、平成21年9月から導入。現在は16人が活動中、これまでに退任した27人のうち19人が定住して活躍している。

しょうね。一方で、市内でも作品があるムラとそうでないムラに違いが生まれているのではないでしょうか。

第3章 ヨソ者が地域を後押し

市長―地域おこし協力隊や大地の芸術祭ではなく、「災害」をきっかけに活性化したムラもあります。新十日町市が誕生する半年前の平成16年に起きた中越大震災で被災した池谷集落です。地理的に上部に位置する入山集落がすでに廃村になっていて、同じような運命を辿るのではないかと集落の皆さんも気を落としていました。そこに世界の紛争地や被災地を支援しているNPO法人JEN（ジェン）が復興ボランティアとして入ってくれました。JENなどを通じて外部の皆さんが地域を支援することで、住民の気持ちが変わりました。そして、わずか6世帯の集落が立ち上がりました。その志に触発された移住者も増え、あまり使いたくない言葉ですが、いわゆる限界集落を脱しました。

小田切―池谷集落は農山村の再生を語るうえで、日本で一番有名な集落です。私たち研究者で池谷を支援した知らない人はほとんどいないでしょう。そこからは多くの学びがありました。

その一つは、地域の外から地域おこし協力隊や復興支援員、ボランティアだけではなく、都市農村交流の人たちも含めて地域に入ることで、住んでいる人たちに当事者意識が生まれ、「自分たちの問題だから自分たちで立ち上がろう」と奮い立たせたことです。このことが農山村再生理論の中核になっているのです。また、その志は多くの人に何かあれば支援したいと思わせました。

市長―当時、取材にあたったエフエムとおかまちの方が「今、70代の人たちが30年後の池谷のことを語っています」と、話していたことが強く印象に残っています。

池谷では、集落周辺でとれたお米を「山清水米」というブランド米にして販売しています。ここの住民を中心に立ち上げたNPO法人「十日町市地域おこし実行委員会」が、生産者から買い受けて販売しています。「池谷を支援したい」という人たちが多く買っているそうです。ブランド米として生産者から高く買い取ることで、喜びの声も聞こえています。今では注文が出荷できる量を上回っているそうです。そこまで集落が変わってきているのです。

小田切―実は私も「山清水米」を購入し、贈答用に使っています。人に贈りたくなるお米ですね。

市長―そうですか！ご支援ありがとうございます。

このことを「では、別の集落でもやったらどうか」と思いますが、なかなか簡単ではありませんね。

小田切―確かにそうした成功事例がすぐに広まり、元気な集落が増えることは難しいですね。ただ、すぐに当てはめることはできなくとも、徐々に受け入れる力がついた後に、その集落のアレンジを加えて取り組むことはできると思います。

大切なことは、「やろう」という気持ちをつくること。そのために外部の力を借りることは大変重要なことです。

外部の力が新たな風を吹かせてくれる――市長

第4章 地域を盛り上げるたくさんの力

市長―十日町市は中越大震災の後も長野県北部地震・新潟福島豪雨など多くの災害に見舞われました。どんなときも外部の力が私たちのまちを強くしてくれました。そのときの関係が良いお付き合いとして続いています。

現在、市の人口はおおまかに言うと1日に自然減で1人、社会減で1人のペースで1年間に700～800人程度の人口が減っています。この状況で地域を元気にするためには、市民と市外に住んでいても十日町市を応援してくれる皆さんと一緒に地域を盛り上げていく仕組みをつくることが大切だと、強く思っています。この仕組みは国が進めている地方創生にもつながるのではないでしょうか。

小田切―その通りだと思います。農山村が存続するための究極の手段は移住者を増やすことですが、移住に至るまでには何段もの階段があります。例えば、東京にいながら十日町市の産品を購入すること、あるいは思いを寄せて十日町市にふるさと納税する。そのうちに気持ちが高まり、しばしば訪ねてみる。次はボランティアとして地域で汗を流す。その延長線上で年間の何日間か十日町市で生活する二地域居住。そして最後に移住となっていくのだと思います。この「関わりの階段」が外部の応援団と共に地域をつくる仕組みそのものではないでしょうか。

産品を買うことも支援、ふるさと納税も支援、汗を流すことも支援。大切なことは、次の段に上がりやすくすることです。産品を買った人にはふるさと納税しやすくすること、ふるさと納税したならば訪れやすくするように階段を上ることをサポートしていただきたいですね。

市長―当市のふるさと納税は初めから多く、県内では平成25年度まで1位の納税額でした。大地の芸術祭の取組みへの賛同や、災害への支援などが多くありました。

また、長野県北部地震のあと、職員提案で関東圏を往復するバス「グリーンライナー」を実施しました。東京都世田谷区を出発して、新宿区・埼玉県和光市を経由しながら十日町市を結ぶバスですが、市内での宿泊、農作業やボランティア活動などの条件を満たせば無料で利用できます。一連の取組みをつなげてPRすることも大切ですね。人口が減少するなか、十日町市出身者など応援団の皆さんとのご縁を大切にし、しっかりと情報をお渡ししたいと考えています。

小田切―「関わりの階段」は、すでに上りやすくしてあるようですね。出身者に市内の出来事や、十日町市の小さな誇りをお伝えして、「それを見に来てほしい・支えてほしい」と訴えることは重要な試みです。一方で出身者でない人たちの取り込みも大切です。現在、東京圏に住んでいる人の約7割が東京圏出身です。東京で生まれ育ち、いわば田舎と呼べる場所がない人がそれだけ多くいるということです。その人たちにPRし、新しい故郷は十日町市だと思える人を増やしてほしいですね。

市長―出身者を介して、田舎のない人たちにアプローチすることも一つの手段だと思います。出身者が「十日町市は素晴らしいまち、ぜひ一度訪れてみて」と自慢してくれるだけでかなりの効果です。そうしますと十日町市は、まだまだ多くの可能性を持っていることになりますね。

「関わりの階段」のサポートが次の支援をつくる――小田切教授

第5章 田園回帰＝農山村再生

市長―都会と田舎では、どちらにも良い面・不便な面があると思っていますが、田舎の良さが過小評価されているように感じています。小田切さんはこの都会志向を、どのように感じていますか。

小田切―今後の社会を考えますと人口を一方的に都市だけに集めて成長産業をつくる国づくりを進めてしまえば、日本は強靭性と弾力性のあるしなやかな国にはなれないでしょう。農山村の人口は減少し、都市も疲弊している今、お互いが支えあうことで「都市なくして農山村なし、農山村なくして都市なし」という相互の連携関係をつくることが重要です。その都市と農村の共生社会を作り上げていく一歩とも言えるのが「田園回帰」という新たな人口移動の流れです。これは、都市に住んでいる若者の、農山村への移住が非常に顕著になっている現象で、地域おこし協力隊はまさにその代表格と言えます。

しかし、この田園回帰の傾向は単なる人口移動ではありません。地域おこし協力隊や移住者の人たちに、その地域を選んだ理由を聞くと、「あの人がいたからここに来た」という答えが返ってきます。移住者の先輩や集落で世話をしてくれたおじいさんなど、具体的な名前が出てくるのです。市長の冒頭のお話のとおり、移住の最も大切なポイントは「人」なのでしょう。そして、移住者から見て輝いている人を育くんでいるのは地域の力です。移住者がもともとの住民と共にさらに地域を磨きあげ、その光に向かって次々と人が訪れています。したがって、田園回帰は単なる人口移動ではなく、農山村再生そのものだと言えるのではないでしょうか。

人が人を呼ぶ、地域が人を呼ぶ。十日町市はそれができる――小田切教授

市長―池谷集落がまさしくそうですね。松代地域にある竹所集落もカール・ベンクスさんというドイツ人が約20年前に移住し、景観も住民の気持ちも大きく変わりました。まずは地域を磨き、人を輝かせることが重要です。

小田切―移住促進を大きな政策で実現しようとすると、理想と費用がどんどん高くなるので、全国の1720あまりの自治体が共倒れになる恐れがあります。地域が今から実践できる手段は人が人を呼ぶ、地域が人を呼ぶこと。大切なことは地域磨きです。

十日町市は、すでにその経験と実績が十分あります。この地域づくり・地域磨きの取組みを続けてさらに輝いて、農山村を持つ自治体のフロントランナーとして全国をひっぱってほしいです。

市長―ここにしかない魅力を世代を越えてつないでいる地域の皆さんを誇りに思います。そして、その魅力を感じ、地域磨きの一員となる方々から移住していただけることに心から感謝しています。小田切先生のご期待にも添えるよう、これからも地域に寄り添った取組みを実践します。

しかし、それでも人口は減っています。この人口減少の傾向を改善させるには、どの程度の定住人口が必要になりますか。

小田切―島根県の中山間研究センターでの試算では、農山村では人口の約1パーセントの若者が毎年戻ってくれれば、約10年後には高齢化率は下がっていく。そして、その状況が続けば30年から40年後には確実に都市よりも若返ると試算されています。

例えば、ある地区の人口を1千人と想定すると1パーセントで10人。世帯数でいうと3～4世帯。Uターンも含め、毎年3～4世帯がその地域に移住すれば10年後には高齢化率は下がります。率で考えると呆然としてしまうことも、具体的な実数で考えると実行に移しやすいです。「あそこの息子は2・3年後に戻ってくるらしい」とか、「あの空き家はだいぶ経つけどもまだ人が住める」、「あそこに1世帯入れば…」など、具体的に想定できますよね。ぜひ地域の人たちでこの可能性を共有してほしいです。

市長―想定できる可能性は私たちの心持ちを明るくしてくれる、まさに太陽のようですね。そのような可能性や夢が見えてくれれば、「それならうちのせがれを呼んでみよう」とか、「知人にも声をかけてみよう」とも考えることができます。

小田切―それが、みんなで可能性を共有化するということなのです。

市長―小田切先生とお話しをしていると、どんどん元気になってきました。

最終章 雪さえも地域磨きの素材へ

市長―当市は大地の芸術祭に取り組むなかで地域を磨き、魅力を高めて、それを発信しています。大地の芸術祭をはじめてから20年が経とうとしていますが、まだまだ磨くものはたくさんあります。本質をしっかりと見極め、少し気をつけることで、さらに魅力的なものになると思っています。

その点では、雪にも魅力はあるのではないでしょうか。雪は全てをきれいに覆いつくします。竹所のカール・ベンクスさんも「雪ふる竹所は世界一美しい場所」と言ってくれています。当市は豪雪地域、そのために多くの人がこの地を離れたのでしょうが、この雪を肯定的にとらえて、資産として活用できるようになれば当市の強みになると思います。

小田切―実は今、田園回帰の傾向が顕著に表れているのは豪雪地域である島根県の西部地域なのです。かつて38豪雪が過疎化の引き金になったような豪雪地域に、多くの人たちが移住しています。四季のはっきりした移り変わりが魅力のようです。十日町市も同様に四季の変化が美しい豪雪地域なので田園回帰の対象として十分可能性があると言えます。さらには、大地の芸術祭という、研ぎ澄まされた強みを持っているので、オンリーワンの存在になれるのではないでしょうか。

住民と応援団の皆さんが磨き上げた地域を発信していきたい――市長

市長―良いお話しを聞かせていただきました。雪さえも地域磨きの素材として生かせるというお墨付きをいただけました。この地域が長年、雪で泣かされたことは事実ですが、今は便利になっています。実際に、雪を経験したことのない移住者でも、雪のある生活を楽しんで暮らしている人がたくさんいます。何より豪雪なら負ける気がしません。大いなる雪を最大限に活用すれば、十日町市はさらに飛躍できるという思いが確信になりました。

２０２０年には、東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。そのときに外国人観光客が東京以外のどの地方に足を向けるかが非常に重要になると思いますが、そこで選ばれる十日町市になりたいですね。外国人から選ばれることで、日本人からも注目を浴びることができるでしょう。十日町市は、今までの太陽路線の取組みを継続して、市民と外部の応援団と一緒に協力して地域を磨き上げていきます。そして、自信を持って発信していきます。本日はありがとうございました。

松代地域特集

竹所のキセキ

昭和34年、39世帯237人が暮らしていた竹所。平成に入り、9世帯にまで減った頃、ドイツ人のカール・ベンクスさんが竹所と出会いました。

「存続か否か」の決断が頭をよぎった過去から、今では、若者や子どもが増えて高齢化集落（限界集落）を脱しました。

本特集では、竹所の軌跡をお伝えします。

竹所の今昔

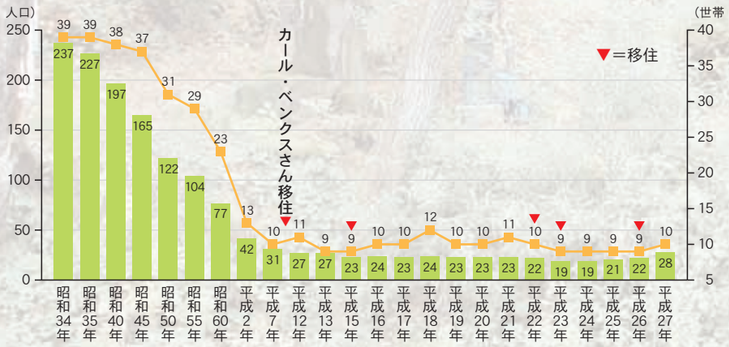
今

カラフルな再生古民家が点在する桃源郷

現在、12軒中7軒は、カール・ベンクスさんが手掛けた色鮮やかな再生古民家。他にはない集落景観をつくっています。

「今では除雪も行き届いていて、苦労はない」とベンクスさん。

竹所 人口・世帯数の変化と移住



昭和34年以降、世帯数も人口も次第に少なくなり、平成15年には9世帯23人に。平成6年のベンクスさんの移住をきっかけに移住者が増え、平成27年12月1日現在は10世帯28人となっています。※統計と移住の時期は必ずしも一致しません

昔

中門造りの家が建ち並ぶ、伝統的な風景

茅葺（かやぶ）き屋根が並ぶ、日本の田舎の原風景を見ることができました。

昭和50年代ごろまでは、除雪車も圧雪車もなく、学校や国道まで約1キロメートルの道のりをカンジキで道踏みしていました。

Local People moved from Outside

竹所を想う

竹所に移住したベンクスさん。竹所で生まれ育った区長の五十嵐さん。それぞれ、集落への思いを語ります。

ムラはなくならない。まずは自分のために心地よい空間には

豊かな自然の中で支え合う暮らし方に憧れ、竹所を選びました。

日本の使われなくなった古民家を探しているとき、隣の木和田原集落にお米を買いにきていた友人に連れられて竹所を訪れました。そして、今住んでいる家周辺の景色に一目ぼれしました。帰るときには、その家を買うことを決めていました。

50歳を過ぎて、より豊かな暮らしを求めていました。それは、山奥に別荘を持つことではなく、地域と一緒に過ごすこと。豊かな自然の中で、住民が支え合う暮らし方そのものが私の夢でした。スイスか南フランスか…。そんなときに竹所に出会ったのです。

文化と雪景色、ここは世界一美しい場所です。

その決断は正解でした。日本の文化はおもしろい。特にこの地域の祭りやどんど焼きなどの伝統行事は、全てが生活に密着した文化で、とても意義深いです。

何より冬の景色は感動を与えてくれます。雪降るときの静かな雰囲気も、晴れた日のまぶしすぎるほどの銀世界も全てが美しく、世界でここにしかないものです。

自分のための空間が広がると、時空も超えて、ムラの存続に。

竹所は自分の空間や時間もありながら、みんなで支え合って生きている場所。私の夢が叶いました。

人が生き生きと住んでいれば、ムラはなくならない。だからまずは、自分のために家とその周りを心地よい空間にしてほしいと願っています。それが集落全体に広がることで、その存在が次世代につながります。支え合いのある集落なら、それが実現するはずです。

カール・ベンクスさん（竹所・72歳）

1942年（昭和17年）、ベルリン（ドイツ）生まれ。㈲カールベンクスアンドアソシエイト代表取締役。家具職人の父親の影響を受け、建築の職に就く。平成５年、竹所で現在の自宅となる古民家を購入し、翌年から移り住む。以降、住みながらにして全国で古民家再生を中心に活躍中。

今は、自信を持って「竹所に住んでいる」と言える

「ムラを閉じるか」。そんなときにベンクスさんが移住しました。

雪道を機械で圧雪していた時代に、ベンクスさんは住み始めました。

当時は、いわゆるヨソ者、ましてやドイツ人であるということで、どうやってつきあったら良いか不安はありました。中には「どうせ2年もすればいなくなる」と言う人もいたほどです。

竹所はそのとき9軒。まわりの集落も加速した勢いで世帯数が減っていました。隣にあった7軒の濁集落は、ムラ中で話し合い、その歴史を閉じました。竹所も一桁の世帯数になり、「ムラを閉じるか」。そんな話もしましたが、何人かは「残る」という固い決意をしました。ベンクスさんが移り住んだのは、ムラが存続で揺れ動いていた頃です。

気持ちと行動、そしてムラの未来に変化が起き始めました。

ベンクスさんは、集落内に自分が手掛ける再生古民家を次々と作ってくれました。そのことで、もともと集落に住んでいた人は減っても、ベンクスさんが作った家と竹所を気に入って移住してくれる人が増えました。

移住者の皆さんは、私たちに多くのことを気付かせてくれました。例えば、ベンクスさんは、冬の除雪をしている私にほぼ毎日、「見てごらん、この景色。とてもきれいでしょ」と話しかけてくれます。正直、雪が好きではありませんでしたが、毎日変化する雪の景色を見ることが楽しみになりました。当たり前だった風景、つらい苦労の思いしかなかった雪のイメージを明るいものに変えてくれました。

そして、その集落内の風景をもっとよくしようと行動するようにもなりました。トラクターの残骸やタイヤの積み残しなどを、集落の一斉清掃で全部撤去しました。古い小屋のトタン、ブルーシートなど「片付けたほうがいいんじゃない」と、お互いに指摘し合えるようになったのは大きな変化です。

移住者を受け入れることで、ムラの本来の豊かさに気付きました。

今思えば、ムラの世帯数が減っていったのは、その生活に苦労しか感じなかったからだと思います。ベンクスさんや移住者の皆さんのおかげで、苦労以上の「豊かさ」に気付きました。今、ムラにいる人たちはその雰囲気を味わっているんじゃないでしょうか。

昔は「どこからきたのですか」と聞かれたときに「竹所」とは言えなく、「上越と十日町の間」と答えていました。今では胸を張って「竹所」と言えます。逆に「知りませんか？」と、尋ねてその良さを伝えるほど。10軒しかない小さな集落ですが、その誇りはどこの集落よりも大きいです。

移住者の皆さんは、この地を気に入ってくれて住んでくれています。その気持ちさえあれば十分。集落の行事でも仕事でも積極的に参加してくれます。ベンクスさんはドイツから移住してくれました。このことで移住者を受け入れる土台ができました。竹所は、日本のどこから来ても仲間として喜んで受け入れたいと思っています。

区長 **五十嵐 富夫**さん（竹所・63歳）

竹所で生まれ育つ。仕事の傍ら、平成16年から民生児童委員として集落や地域の皆さんの暮らしを支援している。集落区長として集落運営に携わって２年目。

竹所集落の取組み

❶毎年恒例のどんど焼きには、集落民より多い人が参加します。　❷中越大震災を機に整備した集落の中央の広場。春のお花見や山菜祭り、夏の盆おどりでにぎわいます。　❸ミズバショウの名所にしようと休耕田を利用して増殖を進めています。　❹ベンクスさんがデザインした「竹所プロジェクト」。夢を共有するきっかけになりました。

小さな集落の大きな可能性

Big potential with in the small village

「移住者を増やす」以外にも、集落を元気にする方法はたくさんあります。竹所が作り上げている関係や、そこでの取組みを紹介します。

2拠点 居住／活動

イエローハウス

6月～11月中旬の毎週土・日曜日オープン

竹所の魅力を感じてもらうお手伝いができれば

「地方で、同世代と集える場をつくれるのならば、その集落との交流がなければ意味がない」と思っていた吉田さん。平成14年にベンクスさんに出会ったことがきっかけで、イエローハウスを購入。東京との往来が始まりました。

❶もとの素材を生かして再生。❷朝ヨガの様子。外部の人の利用も増えている。❸自然に溶け込んだ佇まい。

「道普請などに都合が悪くて参加できなくても、温かく接してくれて。次第に行事や作業に参加させてもらうのが楽しみになっていきました」と集落の皆さんの懐の深さに感謝します。

平成27年6月にカフェをオープン。竹所で唯一ベンクスさんの手がけた古民家の内部を見ることができるので、人気も上々。「集落の皆さんから応援してもらって心強かった」。

今までの恩返しの気持ちもあり、集落に貢献できるようなお店にしたいという強い思いで運営しています。「この家を通じて竹所の魅力を感じてもらえれば。特に若者や出身者の皆さんに気軽に来てほしい」。

吉田 えり子さん（東京都在住・62歳）

会社に勤めながら、イエローハウスで押し花やカリグラフィーの教室を主宰。平成24年からはオープンガーデンとして開放。今年の6月にはカフェをオープンした。

インターン

竹所をもっと深く知りたい

「自然の中で人が暮らしている。命のやり取りが見えるんです」。

福島さんは、竹所に平成27年10月から12月までインターン。「山の中の暮らし、人々の生活を肌で感じられるのがうれしい」と、約2か月間を振り返ります。

日課である牛の世話や、近所の人が大切に育てた野菜やお米をおすそ分けしてもらうことで、命のやり取りの大切さに気づきました。

「都会は、面倒なことを避けて暮らすことができるけど、こちらは自然の脅威も含めて全て受け入れなければならない。その分、寛容で心が広い」と集落の皆さんを尊敬します。

「人が一人で生きていくことには限度がある。助け合わなければ生きていけない環境が自然で、心地良いと感じています」。

「四季を通じて竹所の魅力をもっと知りたい」と、これからの定住を模索しています。

❶❷新屋敷（屋号）のおばあちゃんとする牛の世話が朝の日課。❸ベンクスさんの手伝いも。この日は冬囲い。

福島 有理沙さん（岩手県盛岡市出身・23歳）

新潟大学・大学院の修士課程1年目で遺伝学を専攻している。自然の中で暮らしてみたい思いと、ベンクスさんの古民家再生への興味で、竹所にインターン。

シェアハウス

お試し移住で地域を盛り上げる

市では、シェアハウスを市内に整備する取り組みを始めました。その第一弾が竹所にできます。「若い人が出入りするだけでも雰囲気が変わる」と区長の五十嵐さん。インターン生や移住希望者など、十日町市に興味を持ってくれる人がお試しで住む拠点として活用してもらうものです。

竹所シェアハウス

- 木造2階建て
- 個室6部屋
- 共有スペース（居間・台所・風呂・トイレ）を配備

問 農林課農業企画係 ☎757―3120

外からの応援団

「いつも一緒にいたい」そう思える温かさと真剣さを持っている

高橋さんは、竹所に疎開していた母親の何十年ぶりの来訪をきっかけに、竹所の行事などに参加するようになりました。

初めの訪問から2年が過ぎたころ、「準備こそ人手が必要なのではないか」と考えました。それからは行事だけでなく、その準備や道普請などの作業にも参加するようになりました。

「同じ汗をかいて、お酒を飲んで語り合っているうちに『ふるさと』と思えるようになった」と熱く語ります。「人が温かくて真剣。飲んでても熱く語る。作業は手を抜かない。その人柄に触れ、いつしか『いつも一緒にいたい』と思うようになった」。

高橋さんは、これからも竹所に関わることを決意しています。「出身者や、私のような縁のある人が地域に戻って、できることをやる。そんな流れが継続的にできればいいですね。その家族や友人が地域を知るきっかけもできる。知った人の中には移住したいと思う人がいるかもしれない」と、人が循環する可能性を語ります。

春と秋の道普請には、集落内の建物所有者や出身者、応援団も駆けつける。

高橋 一也さん（埼玉県狭山市・52歳）

経済産業省勤務。竹所が祖父母の出身地であり、母の戦争中の疎開先であることから、約8年前に初来訪。以降、集落の行事から作業まで参加している。

つながる暮らしと命

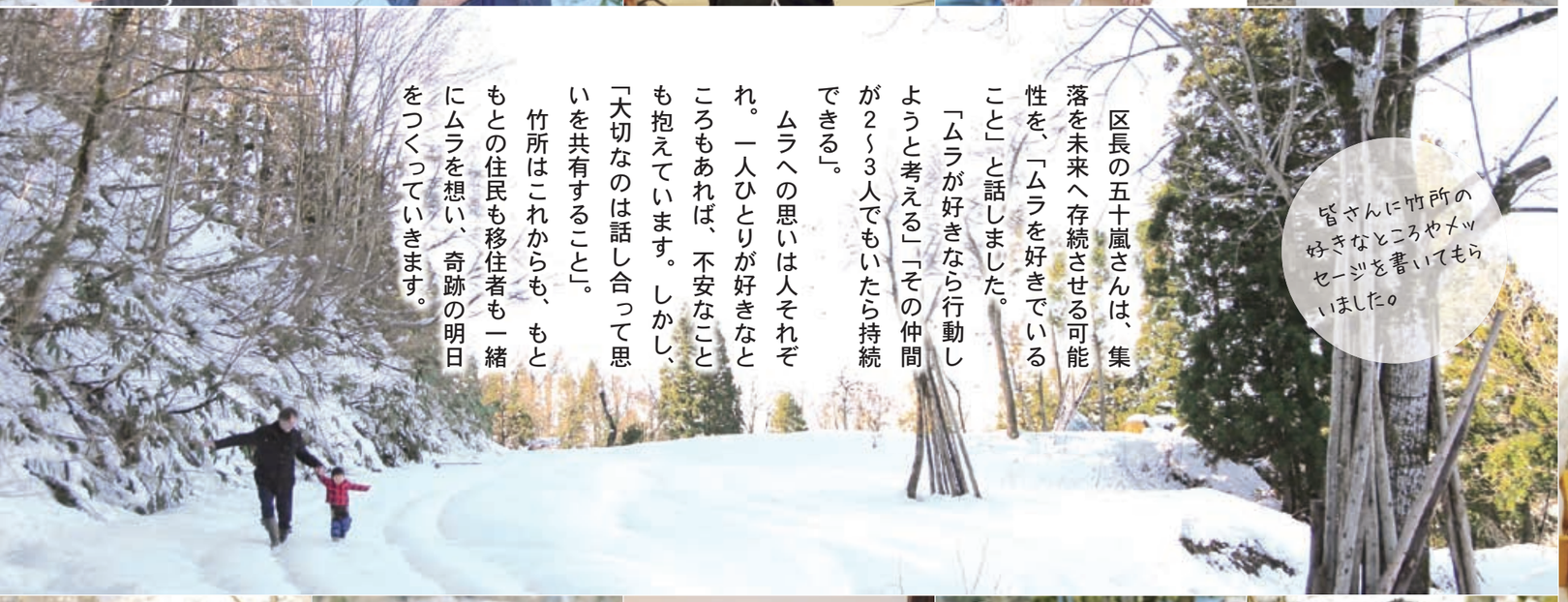
大自然の中で人と関わり合いながら、命を育む

平成25年、竹所に18年ぶりの新しい命が誕生しました。平成23年12月に東京から移住してきた渡辺さん夫妻の長男です。「もともと建築を学んでいたこともあり、古民家再生に興味があった」と世帯主の寿紀さん。東日本大震災を経験して都心での生活に疑問を持ち始めたときに、ベンクスさんと出会いました。

「ベンクスさんが命を吹き込んだ古民家に一目ぼれして『住んじゃおうよ』と、2人で即決しました」と洋子さん。千葉県出身の洋子さんは、「雪深い季節があることで、日本の四季を改めて実感した」と住み始めたころを振り返ります。「一面真っ白で音のない世界。特別な空間だと感じた」と、移住直後の大雪の生活を楽しみました。

昨年の夏には、双子の女の子も生まれ、集落の皆さんも大喜び。「自然は遊びの宝庫。そこで育まれる創造力は計り知れない」「いろいろな世代の人や自然と関わり合いながら子育てができることが良かった」と、この里山での子育てのメリットを語ります。

渡辺寿紀さん・洋子さん・光太くんと
双子のひなたちゃん・かなたちゃん



区長の五十嵐さんは、集落を未来へ存続させる可能性を、「ムラを好きでいること」と話しました。

「ムラが好きなら行動しようと考える」「その仲間が2～3人でもいたら持続できる」。

ムラへの思いは人それぞれ。一人ひとりが好きなところもあれば、不安なことも抱えています。しかし、「大切なのは話し合って思いを共有すること」。

竹所はこれからも、もともとの住民も移住者も一緒にムラを想い、奇跡の明日をつくっていきます。

皆さんに竹所の好きなところやメッセージを書いてもらいました。

27ページに登場

Pick Up 通話録音装置を無料で貸し出し

通話録音で特殊詐欺被害を防ぎましょう

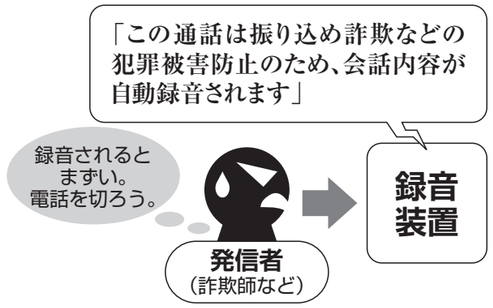
●●●●●問合せ：市消費生活相談窓口（産業政策課内☎757-3740）

市内でも、電話による巧妙な手口で高額なお金をだまし取られる事件（振り込め詐欺など）や、法的手続きをかたり連絡を求める悪質な事例が頻発しています。被害の多くは一本の電話から始まっています。こうした特殊詐欺被害を防ぐため、通話録音装置を無料で貸し出します。

貸し出しまでの流れ

①希望者は申請書（市消費生活相談窓口・市ホームページから入手）を提出
②貸し出し可否の決定を通知
③装置を発送
④装置を自宅の電話に取り付けて利用開始※取り付け作業は利用者でしてください

●**対象者**＝市内に住所がある人
●**貸出期間**＝１年間※終了の届け出がなければ自動更新
●**貸出台数**＝50台※１世帯につき１台
　申請数が貸出台数を越えたときは、過去に詐欺被害にあった人がいる世帯や高齢者世帯などを優先します。
●**申請期間**＝２月15日㈪まで
●**利用料金**＝無料
　利用に必要な電気料・通信料・維持管理費は利用者の負担です。



録音装置の機能

●警告メッセージ機能　電話の着信時に、通話内容を録音することを知らせるメッセージが発信者に流れます。これにより、振り込め詐欺などの犯罪行為に抑止効果があります。

●自動通話録音機能　声紋分析が可能な音質で、2,000件分（最長60時間）の通話を録音できます。

●緊急通報ボタン　ボタンを押すことで、登録した電話番号（４か所）に自動発信します。体調不良などの緊急時にも身の危険を第三者に知らせることができます。

１月～３月｜新潟県悪質商法被害防止共同キャンペーン

若者や高齢者の消費者トラブルを未然防止するための強化期間として実施します。

若者トラブル110番　１月21日㈭～22日㈮
高齢者トラブル110番　２月18日㈭～19日㈮

●**相談**＝市消費生活相談窓口（産業政策課内☎757-3740）

大地の芸術祭の里 こへび隊・サポーター通信㉑

近藤　千恵里さん（原・22歳・製造業）

地元に誇りが持てるようになる

▼地元サポーターになりたいと思った理由
―開催地なので子どもの頃から自然と芸術祭を知っていました。地元のために何か活動したい、何かできないかなと思っていたときに地元サポーターを知り、「これだ」と思いました。

▼サポーター活動を通しての感想
―たくさんの人と出会えて交流できるので、いろいろな目線からの意見を聞けます。住んでいると当たり前になっていて気付かないこと、何とも思っていないようなことが、実は妻有の魅力だと知ることが多く、ますます地元が好きになりました。

▼今後の地元サポーターについて
―妻有には大地の芸術祭をはじめさまざまなイベントがあり、遠くからたくさんのお客さんが来てくれていますが、まだまだ地元の人の関心が低いと感じます。もっと地元の人が地元に興味を持ってくれるといいなと思います。

▼これから「こへび隊」や「地元サポーター」になる人へ一言
―妻有は本当にすてきなところです。そんな妻有をもっと知ってもらえるように一緒に活動しましょう。

■問い合わせ先
「大地の芸術祭」の里
総合案内所
☎761―7767

想史創愛 ふるさとの思い出 4

郷土出身者が写真を添えて昔の思い出を語ります。

高橋　正雄さん
神奈川県横浜市在住
（56歳・高倉出身）

■問合せ
企画政策課広報広聴係
☎757-3112

■苦難に感じた豪雪地域の冬
昭和52年３月の高校卒業まで旧川西町に住んでいました。今思えば豪雪地域の冬は苦難ばかりのように感じていていた気がします。小・中学校・高校のスキー授業も好きではなく、鼻水を垂らしながらつらい時間を過ごしたものです。

■離れて感じる雪の温かさ
進学のため上京しましたが、当時は「雪に悩まされない冬」を過ごせることがうれしく思っていました。上京３年目の冬。大学の友人からの「大自然の中で滑るスキーは楽しいだろうね」の声に、私も「そりゃ、当然さ」と応えてしまい、軽い話の成り行きから、あえて大雪の川西を訪れました。少し不安な気持ちでゲレンデに向かいましたが、そのときのスキーがとても楽しかったのです。
住んでいるときは、つらく嫌な存在だと思っていた「雪」が、そのときはとてもやさしく私を迎え入れてくれました。時を経て離れてやっと理解することができた川西の温かい「雪」。故郷は雪も温かいと感じる今日この頃です。

昭和40年頃、集落の行事で集まる子どもたち

若者×若者 キラメキワーカーズ

十日町市の仕事人

～語る 仕事・会社・十日町市への思い～

■問合せ
産業政策課
☎757-3139

大嶋　美香さん（中条旭町・22歳）

小学生の頃から保育士に憧れ、専門学校で保育士の資格を取得。現職場へ就職して２年目で、現在１歳児を担当。

小林　志歩さん（田川町３・22歳）

小さい頃、近所の年下の子どもたちと遊んでいた経験から保育士を目指し、専門学校で資格を取得。大島さんと同期に就職し、現在０歳児を担当。

誰もが親しむわらべ歌

大嶋さん―今は保育士３人で１歳児11人を担当しています。担任がお互いの動きや思いを共有し、クラスの子ども全員に目が届くように心がけています。

小林さん―当園では特にわらべ歌を使った遊びをしています。わらべ歌で音楽に親しみ、体を動かす楽しさを伝えていますが、子どもたちの覚える早さには本当に驚かされます。

子どもたちが安心して過ごせるように

大嶋さん―園児とのコミュニケーションを常に考えています。言葉の使い方や伝えるときの雰囲気で、子どもの反応が変わります。その関わり方は奥が深く、常に学んでいます。

小林さん―まだ話すことができない子どもでも、指さしやしぐさ、表情で自分の意思を伝えようとがんばっています。お互いの意思や気持ちが伝わると子どもも安心して笑顔が増えるので、もっと意思をくみ取れるようになりたいです。

一人ひとりに寄り添った保育を目指します

大嶋さん―園児にはそれぞれ個性があり、興味や楽しいと思う気持ちにも差があります。それでも全員が笑顔で成長していけるように、一人ひとりに寄り添う保育士でありたいです。

小林さん―何年か経てば担当した園児も卒園していきます。子どもたちが大きくなってから「楽しい保育園だったな」と思い出してもらえるような保育園にしていきたいです。

協力企業　求人あり

■社会福祉法人まどか会　中条保育園
- 保育（生後２か月から就学前児童）
- 十日町市中条中町
- 従業員23人
- ☎757-5446
- 家庭的な雰囲気と規則的な生活の中で十分に遊ぶことで、意欲的な子どもに育つよう保育をしています。

GUIDE ～ お知らせ・ガイド ～

催し・講座

雪国の囲炉裏端（いろりばた）文化体験

日 1月9日(土)～3月27日(日)午前11時30分～午後2時30分頃
休 毎週水曜日のほかイベント時など※要問い合わせ
会 まつだい郷土資料館・まつだい「農舞台」
¥ 3600円、中学生以下1800円※施設見学込み
定 各日10人
内 昼食（地元素材ランチと雪見酒）、古民家の囲炉裏端でのあんぼ焼き、地元の人の民話の語りや交流
〆 前日までに要申し込み※10人以上のときは4日前まで
申・問 まつだい「農舞台」（☎595―6180）

十日町おもちゃ病院

壊れた大切なおもちゃを修理します。
日 1月16日(土)・2月20日(土)・3月19日(土)午前10時～午後3時※受付2時まで
会 はあとふる川西
¥ 原則無料
問 十日町市社会福祉協議会川西支所（☎768―3343）

道楽神（ドウラクジン）と羽根返し（ハネッケエーシ）

市無形民俗慣習に指定されている新水の伝統行事です。
日 1月17日(日)午後2時～点火
会 新水鎮守様※新水ふれあいセンター集合
内 道楽神（正月飾りを燃やしてスルメなどを焼き、五色の紙紐を竹ざおの先につけたおんびろで豊穣を占います）・羽根返し（羽根をコスキという木の板で突き上げる遊び）
他 午前8時からの道楽神・会場作成を手伝った人には昼食にぬか釜ごはんあり
問 飛渡公民館（☎759―2032）※当日は勝倉（☎

第67回 十日町雪まつり情報

PUFFY（パフィー）出演決定!

ツマリアンボール出場チーム募集

３チーム同時に対戦する雪上バレーボールです。
日 2月21日(日)
会 コミュニティひろば（十日町高校グラウンド）
¥ 1チーム4,000円
〆 1月29日(金)午後5時
申・問 申込書（事務局に配置。ホームページでも入手可）を郵送または持参で十日町雪まつり実行委員会事務局（☎757-3100）

コミュニティひろば ボランティア募集

一緒に汗をかいて感動を共有しましょう。
日 2月8日(月)～22日(月)の希望日
対 高校生～40歳位の健康な人
内 雪上茶室・すべり台などの作成・運営
〆 2月7日(日)
申・問 公益社団法人十日町青年会議所事務局・南雲（☎757-5111）

雪上カーニバル出演アーティスト・MCが追加決定しました

アーティスト：PUFFY

MC：イジリー岡田

雪上カーニバルをより近くで見られます!

雪まつりパスポート販売中
●市民割引特別価格＝2,000円
詳細は市報12月25日号をご覧ください。

問 十日町雪まつり実行委員会事務局（☎757-3100）

090―6192―8704）

座談会 第5回SATOYAMAにぎわいトーク

日1月19日㈫午後7時～8時30分
会ベルナティオ（森のホール）
内キッザニアのエデュテイメントと地方創生（キッザニアと地方自治体が連携した、地域の文化や職業を子どもに体験させる取組み事例を紹介）
講上林恭一郎さん（KCJ GROUP㈱取締役専務執行役員）
問あてま森と水辺の教室ポポラ（ベルナティオ内☎758―4811）

三遊亭白鳥師匠独演会

●出演＝三遊亭白鳥さん・三遊亭たん丈さん
【第17回初笑い下条寄席】
日1月23日㈯午後1時30分～
※開場1時
¥1800円（前売り1500円）、中学生以下千円※いずれも入浴券付き
●チケット取り扱い＝会場または下条公民館ほか
会・問下条温泉みよしの湯（☎756―2344）
【第24回初笑い上野寄席楽集】
日1月24日㈰午後2時～※開場1時30分
会上野集会所
¥1800円（前売り1500円）※飲み物・特製グッズ・抽選付き
●チケット取り扱い・問清水フードだいも店ほか（☎768―3630）

新春恒例 川治地区新年娯楽大会

入賞者には豪華賞品、参加賞もあります。
日2月7日㈰午後0時30分～午後5時ごろ※受付正午～
対市内在住の人※麻雀は高校生以下不可
¥千円※中学生以下無料
内囲碁・将棋・花かるた・百人一首・麻雀
他昼食を済ませてから参加してください。申し込みの少ない種目は中止のときあり
〆1月29日㈮
会・申・問川治公民館（☎752―2223）

北陸新幹線「上越妙高駅」開業1周年記念フォーラム

新幹線が地域にもたらす可能性と鉄道を生かしたまちづくりを考えます。トークショーでは鉄道の魅力を紹介。
日3月12日㈯午後1時30分～3時※開場0時30分
会上越文化会館（上越市）
●トークショー出演＝中川家（中川剛さん・中川礼二さん）、横澤夏子さん（司会）
他生後6か月～就学前幼児の保育ルームあり※20人まで。申し込み多数時は抽選
〆2月10日㈬必着
申郵便往復はがきに次のことを明記して〒943―8601上越市木田1―1―3上越市役所新幹線・交通政策課まで
【往信裏面】郵便番号・住所・氏名・電話番号・希望人数（2人まで）※保育ルーム希望者は子どもの氏名（ふりがな）・性別・年齢
【返信表面】郵便番号・住所・氏名
※返信裏面は何も記入しないこと
問新幹線まちづくり推進上越広域連携会議事務局（上越市役所内☎025―526―5111）

クロステン手織り講座・第1講座 裂き織で帯を織る

日4月1日㈮～5月27日㈮の毎週金曜日午前9時30分～午後0時30分
¥1万6500円（材料費別途1万4千円前後）※初回全納
定先着6人※初心者可
講市村久子さん（伝統工芸士）
〆3月11日㈮
会・申・問クロステン（☎757―2323）

募集

市民の皆さんから意見募集 過疎地域自立促進計画（案）平成28年～32年

パブリックコメントとして意見を募集します。
〆1月25日㈪※必着
●資料の閲覧場所＝企画政策課・各支所地域振興課・各公民館・情報館・市ホームページ
●意見の提出方法・問郵送・FAX・電子メール（t-kikaku@city.tokamachi.lg.jp）のいずれかで、〒948―8501千歳町3―3企画政策課（☎757―3193、F752―4635）

福祉・健康

AED設置情報登録のお願い

日本救急医療財団ではAEDの設置状況を地図上で確認できる「AEDマップ」を整備しています。AEDマップに登録されている情報量を増やし、また精度を向上させるため、AED設置情報の登録・更新をお願いします。登録・更新の方法はAEDマップホームページ（https://www.qqzaidanmap.jp/）を確認してください。
問健康づくり推進課成人保健係（☎757―9764）

平成28年度 十日町市奨学生を募集します

対平成28年度に高等学校・高等専門学校・専修学校・大学（短大を含む）に進学予定または在学中で、次の全てに該当する人
・保護者が市内に3年以上住所を有し、市税を滞納していないこと
・学業成績が優秀であること
・経済的な理由で学資の支払いが困難なこと

●**奨学金の月額**
高等学校……1万円
高等専門学校…2万円
専修学校……3万円
大学・短大……3万5,000円

●**貸与期間**
平成28年4月から最短修業年限の終わりまで（無利息）

●**提出書類**
①奨学金等貸与願書
②在学（卒業）学校長の推薦書
③成績証明書
④平成27年度納税証明書（生計中心者である保護者のもの）
⑤世帯の中に平成27年1月2日以降に市内に転入した人（ただし、小・中学生や高校性以上の学生は除く）がいるときは、その人の分の平成27年度（平成26年分）所得課税証明書
※①と②は教育総務課・子育て支援課・市内中学校・郡市内高等学校に用意してあるほか、市ホームページでも入手可
※④と⑤を本人以外が窓口で請求するときは委任状が必要

他修学一時金借受人も若干名募集します。願書は奨学生と併用です。（貸与金額：高等学校20万円、高等専門学校30万円、専修学校30万円、大学・短大50万円）

●**願書受付期間**
1月12日㈫～2月29日㈪必着

申・問教育総務課庶務係（川西庁舎内☎757-3118）
※提出は子育て支援課でも受け付けています
※内定の合否は3月末までに通知します
※借り入れ時には、連帯保証人が2人必要です。1人は保護者、1人は独立した生計を営む成年者で返済能力を有する人です

平成28年度 市内で働く看護師などの修学生を募集します

対平成28年度に次の養成施設に進学または在学する人で、将来市内でその業務に従事しようとする人※市の奨学金を受けていないこと
・保健師　・作業療法士
・助産師　・言語聴覚士
・看護師　・社会福祉士
・准看護師　・精神保健福祉士
・理学療法士　・介護福祉士

●**貸与月額**＝2万5,000円
●**貸与期間**＝平成28年4月から最短修業年限の終わりまで（無利息）
●**提出書類**＝貸与申請書・健康診断書・保証書・口座振込申込書（以上、市ホームページから入手可）・学業成績表

他養成施設卒業後に資格を取得し、引き続き市内でその業務に従事したとき、その期間などにより修学資金の返還が免除になることがあります。詳しくは問い合わせてください
〆2月29日㈪必着
申・問健康づくり推進課地域医療推進係（☎757-3187）

子宮頸がんなどのワクチン接種を受けた人へ

接種後に何らかの症状が生じたことで医療機関を受診し、接種との関連性が認定されると医療費・医療手当が支給されることがあります。心当たりのある人は、至急問い合わせてください。

対平成25年3月31日までに市町村の助成でヒトパピローマウイルスワクチン・ヒブワクチン・小児用肺炎球菌ワクチンのいずれかを接種した人

問独立行政法人医薬品医療機器総合機構救済制度相談窓口（☎0120―149―931または☎03―3506―9411）

赤十字救急法基礎講習会

【夜間講習コース】

日2月2日㈫・17日㈬午後7時～9時※計4時間

会旧本町分庁舎

〆1月25日㈪

¥1500円※教材代・保険料

内心肺蘇生法※ＡＥＤ含む

対満15歳以上で全日程を受講できる人

申・問日赤十日町市地区事務局（社会福祉協議会内☎750―5010）

子育て

ハローパパママ学級

健やかな赤ちゃんを産み、育てていくための教室です。2日目はおむつ交換練習などもありますので、ぜひパパも参加してください。

日2月12日㈮・19日㈮午後1時15分～3時30分

会十日町保健センター（市役所隣）

対平成28年4月～8月出産予定の妊婦とその家族

〆1月29日㈮

申・問健康づくり推進課母子保健係（☎757―9759）

スポーツ

ゲートボール初心者講習会

当日参加も可能です。

日2月7日㈰・21日㈰・3月6日㈰・20日㈰午前9時30分～正午

会市総合体育館

持屋内履き・運動のできる暖かい服装

内日体連ＧＢ公認指導員による基本技術の指導※競技参加可

申・問十日町ＧＢ連盟事務局・久保田（☎752―4600）

くらし・相談

十日町市特別職報酬等審議会

日1月26日㈫午後1時30分～

会市役所本庁

内議員報酬額、市長・副市長・教育長の給与について

問総務課人事係（☎757―9787）

平成28・29年度十日町市入札参加資格審査の申請を受け付けます

平成28・29年度に市が行う建設工事、建設コンサルタントなどの業務、物品購入の入札に参加を希望する事業所は、参加資格審査の申請をしてください。必要書類などの詳細は市ホームページをご覧ください。

●**受付期間**＝2月1日㈪～29日㈪※期間外は申請不可

●**資格有効期間**＝4月1日～平成30年3月31日

●**注意事項**

・平成29年度のみの入札参加資格審査申請は平成29年2月に受付予定です

・建設工事の入札参加資格審査申請には経営事項審査を受けていることが必須条件です。詳細は県土木部管理課建設業室（☎025―280―5386）に問い合せてください

・施設管理や清掃業務など役務の提供のみの業務は申請不要です※資格登録審査制度を設けていません

問財政課契約検査係（☎757―3114）

蔵書点検のため情報館と各分室を休館します

約25万点の全蔵書の確認・見直しを行う、とても大切な作業です。ご理解とご協力をお願いいします。

●**点検期間**＝2月1日㈪～8日㈪

●**休止するサービス**＝情報館・分室の図書・雑誌・音声映像資料の貸出、情報館の情報コーナー・音声映像資料コーナーの利用、集会室など施設の利用

●**図書などの返却**＝情報館と川西・松代分室はブックポストへ返却（音声映像資料とブックポストに入らない大型図書は、点検期間後の開館日に直接返却）、他の分室は公民館の職員に返却

問情報館（☎750―5100）

弁護士による無料法律相談会

日／会・申1月26日㈫／水沢商工会（☎758―3035）、2月25日㈭・3月10日㈭／川西商工会（☎768―2176）いずれも午前10時～正午※要予約

対商工業者など

内1件30分程度

問新潟県商工会連合会長岡支所（☎0258―21―0688）

トオコン2015『本選会』最優秀賞が決定！

日12月19日㈯
会クロステン

今回は社会人などによる「創業部門」と「新分野進出部門」が追加され、今まで以上に多様なビジネスプランが発表されました。大学生から70歳代の事業化を目指した熱いプレゼンテーションに、会場は盛り上がりました。今後は発表者により事業化が進められます。（プラン名［発表者（チーム）名］）

●**最優秀賞・創業部門賞**＝千年ジャケット～Thousand Jacket～（十日町の染織技術を全世界に発信するファッションブランド）［野口智瑛］

●**学生部門賞**＝大地の安心便～ごはん１杯から始める災害保険～［おにぎり（九州大学他、混成チーム）］

●**新分野進出部門賞**＝地域活性マラソン事業（日本海里山マラソンシリーズの開催）［加納由理］

公式ホームページ（http://www.toocon.jp/）でも紹介しています。学生部門のプランの市内事業所による事業化は、その経費の一部を支援します。詳しくは問い合わせてください。

問産業政策課商工振興係（☎757-3139）

税の申告相談

問税務課市民税係（☎757-3716）または各支所市民課

市・県民税の申告相談会

会場によって相談日が異なるので、確認の上、機会を逃がすことがないようにしてください。詳しくは、市報1月25日号に掲載します。

●**受付時間**＝午前９時～11時30分・午後１時～４時

会　場	対象地域	期　　間
川西庁舎	川西地域	３月７日㈪～３月11日㈮
中里庁舎	中里地域	２月16日㈫～２月19日㈮
松代庁舎	松代地域	２月22日㈪～２月26日㈮
松之山庁舎	松之山地域	２月29日㈪～３月４日㈮
十日町保健センター	十日町地域	２月16日㈫～３月15日㈫

※土・日曜日は開催しません

申告の事前相談会

●**受付時間**＝午前９時30分～11時30分・午後１時～４時

期間中の支所申告会場の混雑・待ち時間の緩和のため、次の人を対象に申告の事前相談会を開催します。

・農業所得収支内訳書や医療費明細書の作成に困っている人
・市・県民税の申告が必要な人
・自分は申告が必要なのか、判断に困っている人

※原則として当該支所地域の人が対象ですが、他地域の人も相談できます
※希望者は、各支所市民課に相談日時・内容などを伝え事前に予約してください

会　場	期　日	申し込み・問い合わせ
川西庁舎	２月８日㈪・９日㈫	川西支所市民課（☎768-4956）
中里庁舎	１月28日㈭・29日㈮	中里支所市民課（☎763-2513）
松代庁舎	２月１日㈪・２日㈫	松代支所市民課（☎597-2221）
松之山庁舎	２月４日㈭・５日㈮	松之山支所市民課（☎596-3152）

このとき熱中&夢中

市民活動ネットワークひとサポが、旬な人・団体を紹介します。 94

中魚沼農村地域生活アドバイザー連絡会

今ここからつなぐ地域の未来

農村地域生活アドバイザー制度とは、農業経営や地域づくり・担い手の育成活動をリードする女性農業者を、地域が推薦し県が認定する仕組みです。中魚沼地域では平成4年に認定が始まり、アドバイザー同士の情報共有などをする連絡会も発足。農と地域に関わる日々の暮らしを、女性の目線から捉え、各地で創意工夫を重ねて活動しています。

◆問合せ：会長・水落静子さん（☎090―5318―6760）

旧十日町地域の「かたくりの会」は、イベントでのそば粉クレープや米粉ピザ・かき揚げの販売、みそや笹団子づくりなどを通じて、地元の農産品を活用した料理の味と技術を伝えています。

「アグリ中里ゆめくらぶ」では、休耕田を利用した花き栽培を実施。雪原カーニバルでけんちん汁を振る舞ったり、あちこたね市で野菜を販売したりしてきました。

12月1日には、松代に移住し古民家を独自のデザインで再生するカール・ベンクスさんによる研修会を実施。古民家を活用した地域づくりの実践や、日本の伝統的技術・モノの魅力を訴える熱の込もった言葉に聞き入りました。

「昔は家の中でも地域でも、女衆（しょ）が発言するのは難しかった」と、メンバーは発足当初を振り返ります。女性の立場向上と、農業や地域づくりの知恵を広めるため、メンバーは地道に活動を続けてきました。次第に、集落の集まりや農家研修会の場でも、その立場から声を上げられるようになっていきました。

こうした一人ひとりの取組みが女衆を勇気づけ、近年の若者・よそ者の斬新な取組みの背中を押す基盤となっていきました。減反政策・兼業農家の増加・特産品の創出促進と、時代と共に農家や地域が向き合う課題は変化していますが、活動の継続から地域をより良くしようするメンバーの姿勢に変わりはありません。

「自分に出来ることを一生懸命やっていくことが何より大事」。会長の水落静子さん（願入）がしみじみと語るとおり、土と人と語らう日々の営みの積み重ねが、この地域の礎の一つを築いているのでしょう。

活動を紹介したい団体を募集しています
ひとサポ ☎761―7444

おらほのたから 8

―つなぐ知恵と技―

トコロ（野老）

中條 アヤ子さん（竹所・84歳）

生まれも育ちも竹所。アヤ子さんは、この地の自然や風景と共に生きてきました。「山に育てられたもんさ」。小さい頃から好奇心旺盛で、野に山に駆けまわっていました。

「自然の恵みは生活の中で欠かすことはないね」。トコロもその一つ。山芋の仲間のトコロは、昔から今でもお茶の友として食べられています。「昔は苦くて食べられなかった。いつごろだっけかなぁ。自然においしく食べられるようになった」。

トコロは、お通じを良くする天然の薬。「お腹の弱い人は気を付けた方がいいよ」「自然が私たちを元気にしてくれる。昔からそうやって生きてきたの」。

最近では、集落の移住者を連れて山に。自然に身についた知恵と技を、楽しみながら伝えています。

自然と共に育つ 山の恵みは元気の源

❶カヤをかき分けて進む。❷「このツルの下にあらんだ」。❸❹浅く広く埋まっている。鎌で周りの根を切りながら、トウガで掘り起こす。❺たねんぼで水洗い。❻根が簡単にとれるくらいまで30分～1時間ゆでる。❼「皮をむけば食べるところがなくなるからと、祖母はそのまま食べていたっけ」。

取材した人

地域おこし協力隊 村山 祐太さん

「これ食ってみらっしゃい」と、トコロなど山の恵みをいつもいただいています。初めて同行しましたが、こんなに容易じゃない場所から掘ってくるなんて！知恵も足腰の丈夫さもすごくて驚きました。

里山で育まれた知恵や技をぜひ紹介してください。自薦他薦は問いません。申し込み・問い合わせは企画政策課広報広聴係☎757―3112まで

ジュニア芸術祭

馬場小学校 127

アサガオのゆうえんち

富井　千尋（ちひろ）さん（1年）

葉っぱの色をかえながら、きれいにぬりました。空はタオルでポンポンと色をつけました。ブランコにのって楽しそうな遊園地にしました。

いい天気のきれいな家

井ノ川真彩（まあや）さん（2年）

光のプレゼントの学習で作りました。光を当てたら家の形みたいで、赤く丸いところは太陽みたいでした。名前のMを入れたところも工夫しました。

私とイルカ

樋口紗理称（さりな）さん（3年）

私がイルカにさわっている版画です。くぎやビー玉などを使って、傷をつけていきました。いろいろな模様をつけて、かわいいイルカにしました。

コリントゲームでモンスター狩り

太田　陽（はる）さん（4年）

点数の分だけモンスターにダメージを与えることができます。ゴムをたくさんつけて、いろいろなコースにビー玉がいくように工夫しました。

みんなで楽しくおどろう!

井ノ川彩音（あやね）さん（5年）

女の子が楽しくダンスをしています。ステージに見えるように、ミラーにハートを、ゆかに金銀の折り紙をはって工夫しました。

早起きでがんばるパン職人

山田　美悠（みゆ）さん（6年）

難しかったことは、パンを出す体勢にすることです。倒れないように支えを付けてバランスを保ちました。

■発行/十日町市役所　〒948-8501 新潟県十日町市千歳町3丁目3番地　TEL.025-757-3112　FAX.025-752-4635
E-mail koho@city.tokamachi.lg.jp　URL http://www.city.tokamachi.lg.jp/　■編集/企画政策課広報広聴係